

論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル: Preconception gynecological risk factors of postpartum depression among Japanese women: The Japan Environment and Children's Study (JECS)

和文タイトル: 日本人女性における産後うつと妊娠前の婦人科系リスク要因 (JECS)

ユニットセンター (UC) 等名: 高知 UC

サブユニットセンター (SUC) 名:

発表雑誌名: Journal of Affective Disorders 巻: 217 頁: 34-41 年: 2017 月: 8

筆頭著者名: Sifa Marie Joelle Muchanga

所属 UC 名: 高知 UC

目的:

日本では出産後の女性の5-10%が産後うつを経験するといわれている。先行研究の多くは産後うつのリスク要因として心理社会的要因、精神的要因に焦点を当てており、身体的要因には殆ど焦点が当てられていなかったため、エコチル調査の大規模データを用い、身体的要因の1つである婦人科疾患と産後うつとの関連を調べた。

方法:

エコチル調査は10万人の妊婦さんを対象に、お子さんがお母さんのお腹の中にいるときから13歳になるまでの健康情報等を調べる大規模調査で、全国15カ所のユニットセンターで平成22年度より調査を行っている。本研究では研究対象者82,489人の出産時のデータを用いて、産後うつ傾向のある11,341人(14%)と傾向のない77,148人を比較した。

結果:

婦人科疾患の病歴を持つ対象者の割合は産後うつ傾向のある人が産後うつ傾向のない人より多いことが分かった。また、年齢等の背景因子の違いを調整してリスクの指標を算出したところ、月経困難や子宮内膜症、不正子宮出血でリスクの指標が高まることを見出した。

考察: (研究の限界を含める)

本研究は、エコチル調査の中心課題ではないため、婦人科疾患についての詳細を検討できたわけではなく、また、婦人科疾患のうち子宮内膜症など自記式質問票によって収集されたものもある。

結論:

現在、婦人科疾患は、心理社会的要因や精神的要因とは異なり、産後うつのリスク因子として日常的には考慮されていない。本研究により、これら婦人科疾患の診断結果を使って産後うつに罹るリスクを予測したり、ホルモン療法で産後うつを治療する可能性が示された。